

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18330133

研究課題名（和文）格差社会での協同：格差解消に至る基礎過程の解明と処方的研究への展開

研究課題名（英文） How to promote cooperation in an unequal society: Extending the findings of studies of basic psychological process to prescriptive studies.

研究代表者

氏名：唐沢 かおり

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：50249348

研究成果の概要（和文）：

本研究は、劣位な立場にいる人たちに対する支援や格差の解消に関する意図・判断を規定する心理学的要因を同定するとともに、研究で得られた社会心理学的知見に関する社会介入の実現性や介入がもたらす倫理的問題を検討し、社会心理学の基礎研究を、実社会の問題解決や制度設計に生かすことを目指した「処方的研究」へと展開するための方法論について議論する。

研究成果の概要（英文）：

This study examined the determinants of attitudes toward under-privileged. More specifically, it focuses on the intention of support provision and attitude toward the governmental intervention to reduce the inequality. Furthermore, the study discusses the contribution of social psychological knowledge to solve the real world problems such as inequality, the ethical issues concerning the application of the knowledge, and the methodology of the prescriptive studies whose major thrust is to provide with the practical guidance for social system planning to solve the problems in our society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	4,000,000	623,000	4,623,000
2007 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2008 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2009 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
総計	15,000,000	3,923,000	18,923,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的認知・感情 社会的公正

1. 研究開始当初の背景

現在の社会は、国や地域、職業、性別、学歴、年齢、社会階層など、個人を定義する諸属性により社会から得ている評価や資源に差があり、不平等さ・不公正さが生じている。このような状況では、劣位な立場

の人たちに対する支援や不平等・不公正を解消するための方策が、個人の行動・公共の政策の両方で求められる。特定の集団に対する差別意識の解消や、劣位な立場の人たちへの個人的・組織的支援や、公的な支援策・優遇策などが具体的な事例の典型と

して挙げられるが、不平等さや不公平さに対する人々の認知や評価、達成したい状態に対する要求がおかれた立場により異なり、両者ともに納得のできる公正な社会状況を協同して構築することがときとして困難となっている。

この問題に対して、本研究は、社会心理学の知見を適用し、人々の協同にかかわる態度の規定要因を明らかにしようとするものである。具体的には、不平等・不公平から支援や協同への過程を論ずるという点で、社会的公正や道徳的判断と支援に関する研究(Weiner, 2005 等)、相対的剥奪観や相対的特権理論研究(Walker & Smith, 2002 等)を基盤とし、優位・劣位な立場にある集団認知を扱った偏見・ステレオタイプ研究、立場の異なる集団間での認知や動機・行動を扱った集団間関係研究の理論や知見にのっとなっている。

また、本研究の構想や具体的検討課題は、国内外の先行研究に加えて、研究代表者がこれまで実施してきた集団間支援(Karasawa, 2002 他)、不公平さ認知と支援(唐沢, 2003)、ステレオタイプ判断(野寺・唐沢, 2005 など)、社会的支援(唐沢, 2001, 2004)に関する研究で得られた知見に基づくものである。これら国内外の研究や自らの研究は、いずれも不公正、偏見、集団間関係など、社会問題となる諸現象を出発点とし、そこに関与する社会的情報処理過程の解明を目指すものである。本研究は、格差から協同までの過程に関与する、認知・感情・動機づけ変数の関係と情報処理特性を解明しつつ、社会心理学の知見が社会問題に寄与する道を探るものであると同時に、社会的認知を中心とする基礎的研究知見から処方的研究への展開を目指している。

2. 研究の目的

本研究は、不平等・不公正が存在する社会を「格差社会」と定義し、劣位な立場にいる人々に対する支援や格差の解消に関する意図・判断を規定する心理学的要因を同定し、優位な立場・劣位な立場の両者が格差解消にむけて協同するために必要な条件を検討することを目的としている。また、研究で得られた社会心理学的知見を、格差に関わる問題解決に役立てる可能性について、社会介入の実現性や介入がもたらす倫理的問題の観点から検討し、社会心理学の基礎研究を、実社会の問題解決や制度設計に生かすことを目指した「処方的研究」へと展開するための方法論の確立をめざす。

3. 研究の方法

研究は、(1)優位・劣位な立場間での格差

認知バイアスと支援意図、(2)協同にかかわる基礎的な社会的認知過程の検討、(3)支援促進や格差解消を促進する社会介入の可能性と倫理的・方法論的問題の検討の、3つのサブプロジェクトから構成した。各サブプロジェクトの具体的な方法については次の通りである。

(1) 優位・劣位な立場間での格差認知バイアスと支援意図

優位な立場から劣位な立場にある他者、他集団に対する支援意図を規定する要因を、実験、調査、アーカイブデータの2次分析により解明した。実験は、仮想世界ゲームを用いて、優位・劣位集団を作り、ゲーム内における支援意図とその規定要因を検討した。調査は、高齢者・女性の就労に関わる態度を検討対象として、一般市民をサンプルとした。アーカイブデータによる2次分析は、SSJDA(Social Science Japan Data Archive)から、1990年以降で、個人を対象とする、生活保障の責任帰属と社会保障政策に対する態度の変数を含む3調査を選択して、分析対象とした。

(2) 協同にかかわる基礎的な社会的認知過程の検討

基礎的な社会的認知過程として、自己制御、説得的メッセージ理解、ステレオタイプの判断を対象として、実験室実験を実施した。自己制御に関しては、制御資源および制御焦点を操作し、制御行動や感情活性への影響を検討した。説得的メッセージ理解については、情動的メッセージの効果や、メッセージ後の反芻思考や、怒り・恐怖喚起の観点から検討した。ステレオタイプの判断に関しては、存在脅威と平等主義的規範の活性の影響や、性別役割ステレオタイプ活性を題材に、IATを用いて、検討した。

(3) 支援促進や格差解消を促進する社会介入の可能性と倫理的・方法論的問題の検討

定期的な研究会に加えて、社会心理学会など、関連する学会において、ワークショップやシンポジウムを開催し、議論を行った。

4. 研究成果

(1) 優位・劣位な立場間での格差認知バイアスと支援意図

格差の大きさや質の認知におけるバイアス・格差の根拠や正当性に関する原因や責任帰属における認知バイアスの存在、支援意図の規定要因を明らかにするために、仮想世界ゲームによる実験的検討、一般成人を対象とした調査、アーカイブデータの2次分析を行った。

① 仮想世界ゲームによる実験

有利な立場にいる人々の不公平さの認知が他集団に対しての支援的態度に与える影響を、責任帰属と罪悪感の媒介的役割に着

目して検討した。仮想世界ゲームは2つの豊かな地域と2つの貧しい地域から構成されており、貧しい地域に所属する参加者がゲーム内で生存するためには豊かな地域からのサポートを得ることが重要である。豊かな地域に所属した参加者からのデータをパス解析により分析した結果、不公平さの認知が、貧しい地域の苦境に対して自分たちの地域が責任を持つという認知につながり、罪悪感を喚起した。さらに、罪悪感が友好的な関係志向につながり、そのような関係志向が支援的態度を高めた。このような結果は、罪悪感が実際の相互作用を伴う状況でより重要な役割を果たす可能性や、罪悪感の起源を視野に入れた研究の必要性を示すものであった。

② 調査研究

一般成人をサンプルとして、高齢者や女性の就労環境を対象に、失業や就労が困難であることへの責任帰属、共感、立場取得、政治的態度、ステレオタイプの信念の影響を検討した。分析の結果、責任帰属は、社会的・個人的責任・運命的原因から構成されていることが確認された。また、ネガティブなステレオタイプや保守的な政治的態度を持つほど、失業や就労の困難さの原因が社会的原因よりも個人的原因に帰属されることが示された。また、個人的原因への帰属は怒りを増加させる一方、社会的原因は、同情と失業支援政策への賛意や就労促進政策への賛意を増加させた。さらに、高齢者に対しては、高齢者の立場を想像するほど、若年層は高齢者に対してネガティブな態度をとることが示された。これは、高齢者を想起することで喚起される「老い」への恐怖が、高齢者に対する拒絶的反応を促進した結果と解釈される。

③ 社会調査データの二次分析

一般的な弱者支援を対象として、人々が社会保障政策に対する態度を決定する過程を解決責任の観点から検討した。分析の結果、低所得者は高所得者よりも、社会保障の対象となる人々の生活を保障する政府の責任を重く判断し、社会保障政策を支持することが明らかになった。

(2) 協同にかかわる基礎的な社会的認知過程の検討

協同に関わる社会的認知過程として自己制御過程、説得的メッセージ理解過程、ステレオタイプの判断過程に焦点をあて、実験的検討を行った。

① 自己制御過程に関する実験

制御資源、制御焦点や感情活性を検討の対象とした。プライミングの手法を用いて、予期感情と制御資源の影響を検討した実験では、制御資源を持つ被験者は、予期感情の種類に関わらず自己統制に成功する一方、制御資源を制限され、かつ、長期的ネガティブ感情をプライミングされなかった被験者は、自

己統制に失敗したことが示された。さらに、自己制御に必要とされる感情活性が、制御課題遂行以前においても、制御焦点に影響され、促進焦点時には、喜びや落胆、予防焦点時には、安心や動揺が優勢になることが示された。これらの結果より、自己利益の抑制やジレンマ事態での自己統制が必要とされる協同場面において、その成功・失敗に、感情予期が関与していることが示されると共に、制御資源の確保や、制御焦点の操作が、協同の成功を促進する可能性が示唆された。

② 説得的メッセージ理解についての実験

情動的メッセージの効果に焦点を当てた研究を実施した。メッセージ反芻による思考の影響を検討する実験では、反芻思考の効果は、情動的なメッセージを与えられた場合のほうが強く、また、その効果は情動的思考に媒介されていたことから、情動的な思考が態度変化を促進するメカニズムが示された。さらに、メッセージにより喚起された怒り感情、または、恐怖感情の効果を検討した実験では、問題の不当さを批判し、その解決を主張する怒りを喚起するメッセージの場合は、批判の対象となっている問題が不当であることの認知を強め、解決を志向させることによって、メッセージへの賛同を高めていた。一方、恐怖を訴えるメッセージの場合は、脅威となる事態が生じる可能性認知が高まり、危険の回避を志向させることによって、メッセージへの賛同を高めていた。格差に関するメッセージを一般に伝える際、不当さや格差がもたらす脅威に焦点が当てられることが多いが、これらの研究は、それぞれにおいて、メッセージ受容促進に怒りや恐怖による情動的思考が促進されることの効果を示唆するものである。

③ ステレオタイプの判断についての実験

存在脅威活性化の影響と、平等主義的社会規範の活性化の影響を検討する実験を実施した。実験はいずれも性役割ステレオタイプを対象にして、IATを用いてステレオタイプ活性を測定したものである。存在脅威に関しては、恐怖管理理論の予測どおり、死すべき運命の顕現化が、我々の文化的価値観の一部であるジェンダースtereotypeを支持する反応を促進した。また、平等概念に関連する語のプライミング操作の効果を検討した実験からは、平等概念の活性化による、ステレオタイプ活性抑制効果が認められた。ステレオタイプの反応は、協同を抑制する変数となることが調査研究から示されており、協同を抑制、促進する社会的認知要因が、これらの実験で同定された。

(3) 支援促進や格差解消を促進する社会介入の可能性と倫理的・方法論的問題の検討

日本心理学会、日本社会心理学会、科学哲学会等のワークショップ、シンポジウムにお

いて、社会制度の設計に対して、人々の態度や行動を変える操作を提言することで、社会心理学が背負う責任や倫理的問題や方法論上の問題点について議論を行った。議論では、社会心理学、特に、社会的認知研究が、実社会での制度設計に対しての有益な提言を行うために、扱う変数の主観性に以下に基盤を持たせるかが、課題のひとつであることが論じられた。研究が「社会的」であるためには、感情や動機、意図などが果たす役割を扱うことが不可欠であるが、外部からの実学的要請に答えるためには、「動機」「意図」といった構成概念と「環境」や「行動」といった実学において重視される諸要素との関連を科学的に明らかにしていく必要がある。すなわち、人が置かれた社会環境内の諸条件とその中での行動を結ぶ仕組みとして、行為者の「こころ」の動機や意図などの概念に焦点を当て、「環境→動機などの構成概念→行動」というモデルに従った行動変容のための提言を求められるという結論を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 25 件)

1. 大高瑞郁・唐沢かおり (2010) 所得による生活保障の責任帰属バイアスと社会保障政策に対する態度の違い 査読あり 実験社会心理学研究 (in print)
2. 唐沢かおり・月元敬 (2010) 情報処理スタイルが不思議現象の信じやすさに及ぼす影響 人間環境学研究, 査読あり 8, 1-5.
3. 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡 (2009) 景観保全に及ぼす大衆性の破壊的影響に関する全国調査—オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆— 土木計画学研究・論文集 査読あり 26, 377-382
4. 羽鳥剛史, 藤井聡, 水野絵夢 (2009) 政府の公共事業を巡る賛否世論の政治心理学的分析 土木学会論文集 D 査読あり 65, 225-228
5. Selart, M. Nordstrom, T., Kuvaas, B., Takemura, K. (2008) Effects of Reward on Self-regulation, Intrinsic Motivation and Creativity. Scandinavian Journal of Educational Research, 査読あり 52, 439-458.
6. 磯部綾美, 久富哲兵, 松井豊, 宇井美代子, 高橋尚也, 大庭剛司, 竹村和久 (2008) 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究 査読あり 179, 453-458
7. 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡 (2008) 大衆性尺度の構成—“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析— 心理学研究 査読あり 79, 423-431
8. 鈴木 春菜, 藤井 聡 (2008) 「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究 土木学会論文集 D 査読あり 64, 190-200
9. 八田武俊・岩原昭彦・唐沢かおり・八田武志 (2007) 日本人中高年者の化粧行動に関する研究：自意識との関係分析から 人間環境学研究, 査読あり 5, 45-50.
10. 具志堅伸隆・唐沢かおり (2007) 情動的メッセージと反すう思考による説得効果 実験社会心理学研究, 査読あり 46, 40-52.
11. 唐沢かおり (2007) 社会を描く心の働きの自動性と制御可能性：ステレオタイプ活性をてがかりに 東京大学文学部次世代人文開発センター研究紀要, 査読なし 20, 25-34.
12. 竹橋洋毅・唐沢かおり (2007) 目標フレーミングが感情表象の活性に与える影響 心理学研究, 査読あり 78, 372-380.
13. 野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子 (2007) 恐怖管理理論に基づく性役割ステレオタイプ活性の促進要因の検討 社会心理学研究, 査読あり 23, 195-201.
14. Karasawa, K., Motoyoshi, T., Tanaka, H., & Koga, K. (2007) How to promote the behavior for energy saving: The effect of personal feedback concerning energy consumption of others. Proceedings of International Symposium of EcoTopia Science, 査読あり 1175-1177.
15. Takemura, K. (2007). Ambiguous comparative judgment: Fuzzy set model and data analysis. Japanese Psychological Research, 査読あり 49, 148-156
16. 山岡洋・唐沢かおり (2006) 遅延コストジレンマ事態での自己統制規定因の検討—感情予期と制御資源の役割—心理学研究. 査読あり 77, 10-18.
17. 唐沢かおり・三谷信広 (2006) 不公平さの認知と他集団への支援の態度：罪悪感と責任帰属の役割 実験社会心理学研究, 査読あり 45, 158-166.
18. 唐沢かおり (2006) 家族メンバーによる高齢者介護の継続意志を規定する要因 社会心理学研究, 査読あり 172-179.
19. 具志堅伸隆・唐沢かおり (2006) 怒りと恐怖がもたらす説得効果 社会心理

- 学研究, 査読あり 22, 155-164.
20. 八田武志・唐沢かおり・高橋晋也・原田昌幸・久野寛 (2006) 中高年が立てたい理想の住宅とは: 身体機能の効用感および家庭滞在志向との関連分析から人間環境学研究, 査読あり 4, 45-50.
 21. Selart, M., Kuvaas, B., Boe, O., & Takemura, K. 2006, The influence of decision heuristics and overconfidence on multi-attribute choice: A process-tracing study. *European Journal of Cognitive Psychology*, 査読あり 18, 437-453.
 22. 竹村和久 (2006) リスク社会における判断と意思決定 認知科学. 査読あり 13, 17-31.
 23. 唐沢かおり (2009) 高齢者介護における人間関係と家族介護者の精神的健康 人間環境学研究, 査読あり 7, 1-7.
 24. Takahashi, H., Ideno, T., Okubo, S., Matsui, H., Takemura, K., Matsuura, M., Kato, M., Okubo, Y. 2009 Impact of changing the Japanese term for "schizophrenia" for reasons of stereotypical beliefs of schizophrenia in Japanese youth *Schizophrenia Research*, 査読あり 112 149-152.
 25. 唐沢かおり・大高瑞郁・竹内真純 (2010) 中高齢者の失業に対する政策への態度規定要因: 原因帰属からのアプローチ 社会心理学研究, 査読あり 25, 178-187.

[学会発表] (計 24 件)

1. 竹村和久, 井出野尚, 大久保重孝, 小高文聰, 高橋英彦 消費者の選好に関する神経経済学的研究—認知反応と脳画像解析— 消費者行動研究学会 2009 年 11 月 1 日 広島経済大学
2. 橋本剛明・唐沢かおり・大高 瑞郁 侵害者の謝罪に対する被害者と第三者の許し: 社会的目標の観点からの検討 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 12 日 大阪大学
3. 竹内 真純・唐沢かおり 高齢労働者・女性労働者に対する態度—高齢者と女性に対する視点取得の効果の違い— 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 12 日 大阪大学
4. 尾崎由佳・唐沢かおり 制御焦点の活性化とポジティブ/ネガティブな自己側面への注目が利得接近傾向と損失回避傾向にもたらす影響 日本社会心理学

- 会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 12 日 大阪大学
5. Hashimoto, T & Karasawa, K. Transgressor Apology for the Victim and the Third-party: Its Effects on Cognition, Emotion, and Motivation 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 11 日 大阪大学
 6. 大高 瑞郁・唐沢かおり 出来事の帰属が父子関係の良好さに与える効果: パネル調査による検討 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 10 日 大阪大学
 7. 竹橋洋毅・唐沢かおり 制御焦点が多目的状況での制御資源の配分に与える影響 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 11 日 大阪大学
 8. 大高 瑞郁・唐沢かおり 親との政治的会話と子どもの政治的有効性感覚の関連 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会 2009 年 10 月 11 日 大阪大学
 9. Toyosawa, J, Karasawa, K., & Fukuwa N. Effects of the fear-arousing communication for disaster preparedness actions and longitudinal changes of fear and risk perception The 10th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 2009 年 2 月 7 日 Tampa USA
 10. Takehashi, H., & Karasawa K. The effects of negative emotions guided by regulatory focus on decision making about goal pursuit The 10th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 2009 年 2 月 7 日 Tampa USA
 11. Nodera, A & Karasawa, K. Someone to watch over me: The effect of the ingroup norm on implicit gender role attitudes The 10th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 2009 年 2 月 5 日 Tampa USA
 12. Takemura, K., Matsuyama, S., & Kobayashi, M. Analysis of Ambiguous Comparative Judgment for Personal Computer.. society for fuzzy theory and intelligent informations, Fukui, Japan 2008 年 11 月 9 日 福井大学
 13. 野寺綾・唐沢かおり 他者の視線が性役

- 割ステレオタイプの想起可能性に及ぼす影響日本社会心理学会第49回大会
2008年11月3日鹿児島大学
14. 竹橋洋毅・唐沢かおり 制御焦点関連の感情が目標と方略の変容に与える影響
日本社会心理学会第49回大会 2008年11月3日 鹿児島大学
 15. 豊沢純子, 唐沢かおり, 戸田山和久 「遺伝子組み換え技術に対する態度とその規定因—実在する生物を対象とした検討—」日本社会心理学会第49回大会
2008年11月3日 2008年11月3日
 16. 竹内真純, 唐沢かおり セクシズム・エイジズムが就労格差の帰属および是正策への態度に与える効果 日本社会心理学会第49回大会 2008年11月3日鹿児島大学
 17. 大高瑞郁・唐沢かおり 視点取得と出来事の帰属の関連—父子関係における検討—日本社会心理学会第49回大会
2008年11月3日 鹿児島大学
 18. 唐沢かおり・山口裕幸・戸田山和久・出口康夫 2008 「社会心理学方法論の再検討：パート2」第49回日本社会心理学会ワークショップ 2008年11月3日鹿児島大学
 19. 野寺綾・唐沢かおり 他者の視線が性役割ステレオタイプ活性に及ぼす影響
第48回日本社会心理学会 2007年9月24日 早稲田大学
 20. 山岡洋・唐沢かおり 未来の活動表象と時間的変容と制御資源の関係 第48回日本社会心理学会 2007年9月23日 早稲田大学
 21. 豊沢純子・唐沢かおり 認知スタイルと情報の選択—論理的な思考スタイルと持つ人が処理しやすい情報とは 第48回日本社会心理学会 2007年9月23日 早稲田大学
 22. 大高瑞郁・唐沢かおり 優位・劣位な立場による格差認知バイアスと解消に対する態度 第48回大会日本社会心理学会 2007年9月22日 早稲田大学
 23. 竹内真純 唐沢かおり ステレオタイプの使用と正当化がその後の判断に与える影響 第48回日本社会心理学会
2007年9月22日 早稲田大学
 24. 野寺綾・唐沢かおり 平等主義規範が潜在的な性役割ステレオタイプ反応に及ぼす影響 日本心理学会第72回大会
2008年9月21日 北海道大学

[図書] (計 3件)

1. バーナード・ワイナー (2007) 『社会的動機づけの心理学：他者を裁く心と道徳的感情』, 北大路書房 (速水敏彦・唐沢かおり 監訳) (Weiner, B. (2006)

Social Motivation, Justice, and the Moral Emotions: An Attributional Approach. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.) 232 頁

2. 唐沢かおり・八田武志 (共編著) (2009) 幸せな高齢者としての生活. ナカニシヤ出版 243 頁
3. 竹村和久 2009 行動意思決定論—経済行動の心理学 日本評論社 250 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

唐沢 かおり (KARASAWA KAORI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：50249348

(2) 研究分担者

戸田山 和久 (TODAYAMA KAZUHISA)
名古屋大学・大学院情報科学研究科・教授
研究者番号：90217513
竹村 和久 (TAKEMURA KAZUHISA)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：10212028
藤井 聡 (FUJII SATOSHI)
京都大学・大学院工学研究科
研究者番号：80252469